



男は 痛い !

國友万裕

第14回

あぜ道のダンディ

1. ぼっち君だった俺に。

2月で51歳になった。思えば、大学で非常勤として教え始めて22年が過ぎたのだ。月日のたつこの早さにうたた感慨だ。

俺の人生は、30歳で大きな転機を迎えた。俺が大学の非常勤として仕事をし始めたのは29歳の時だった。大学院の博士課程を満期退学した春からである。ちなみにN先生は、29歳ですでにR大学に専任が決まっている。俺の周りは、そこまで順調に行く人はいなかったが、それでも、当時は英語の人だと大学院に在学中から、大学に非常勤に行っている人が大半で、俺は普通の人よりも出遅れた。

これには理由がある。俺は開き直って、大学院生活を送っていた。当時の常識では、20代の後半にもなれば、親に頼らずにバイトと奨学金だけでどうにかまかなう生活を送るべきだったのだろう。しかし、俺は、大学院に入った時点で、そのことをあきらめた。

俺の大学生活は、心が揺れに揺れ、半狂乱のような状況の4年間だった。俺の大学生活に対する期待は大きかった。しかし、考えが甘かったのだ。まだ不登校という言葉もない頃、学校に行けなくなり、3年も引きこもっていた俺が、大学に入ったからすぐに他の人に追いつけるわけがない。やることなすこと裏目に出る4年間だった。

「N先生は、法学部だったわけですよ。でも、俺は英文科だったんですよ。だから女の子が7割以上だった。まだ女性とつきあうような状態じゃなかったのに、女の子ばかりのなかに投げ込まれて、男は10人くらいだっ

たし、もっと多かったら、一人ぐらい気の合う相棒が見付かっていたのかも知れないんだけど……あまりいい思い出ないんですよね」
と俺はN先生に話した。

何よりもつらかったのは、昼食時だった。お昼時になると、学食はごった返す。近くの喫茶店も満杯になる。あの頃は今に比べるとコンビニも少なく、学生たちが皆で集う学食や食堂で、一人で昼飯を食べるのは惨めだった。時間をずらして、空いている時間に一人で食べたりもしたものだ。

「ぼっち君、だったんだね」とN先生は言ってくれた。

授業も徒労だった。あの頃、出席の代返や代筆は当たり前のことのように行われていた。だけど、俺は代返してくれる人もいない。出席するしかない。大講義は、1回も出席せずにテストの時になって、初めて先生の顔を見るというやつもざらだった。他の連中は、友人関係がしっかりしていたので、友達から情報やノートをかき集めて、要領よく単位をとっていた。俺は授業に出てはいたものの、嵐のような心を抱えて、授業に集中する事はできなかったし、情報がはいらないので、成績も大してよくはなかった。今となっては何の意味もなさない出席だったのである。

あの当時の俺は、藁をもすがる気持ちで授業にだけは出ていた。何でもいい。糸口が見付かることを期待して……。どこにも行くところのなかった俺は、ひたすらキャンパスのなかを徘徊していた。俺としては、心を鎮めるため、そして誰かに声をかけて欲しくてしていたこと。せつかく入った大学だったから、大学の隅々まで知りたい。どこかに自分の居場所をつくりたい、その一心でもあったのだ。

しかし、自分の居場所は見つからない。むしろ、用もないのにウロウロ徘徊している人というレッテルを貼られ、白眼視される毎日が続いた。あげくに卒業間際になってトラウマ的な事件が起き、俺は憎しみの残るような気持ちで大学を去る事になった。大学院は他の大学に進んだ。その大学では上手くいったのだが、当時、そこは修士課程しかなかった。博士課程はまた新たな別の大学に行くことになった。言ってみれば、渡り鳥だ。

博士課程は兵庫県の大学だった。入学してしばらくたったら神戸に引っ越そうと思っていた。しかし、京都からでも通えることがわかった。それに博士課程は週に1日だけ出席すれば済む。定期券も学生用の定期は安い。俺は京都から通うと割り切った。俺は京都にこもり、できる限り人付き合いをせず、細々と切り詰めた生活をした。

俺は大学時代に親の金を使い過ぎた。あの頃の俺は金を使うくらいしか、心を沈める手段がなく、幸い、あの当時は親にお金のゆとりがあったため、どうにかお金に頼って乗り越えたのだ。相当な額の食費も使っていた。あの当時、わら天神のところにジョイみのきちというレストランがあった。俺はあそこの常連客だった。「学生が食べるところじゃないよね」とN先生。でも、仕方がなかったのだ。学校の近くの安い食堂だと学生のグループばかりだから、ぼっち君の俺はいたたまれなくなる。自炊しようにも料理どころじゃなかった。部屋は無残に散らかり放題。あの当時の散らかりようは、今思えば我ながら想像を絶するもので、あの当時の俺の心のメタファーである。

親には、経済的負担だけではなく、相当な

心配をかけた。もうあれだけの親不孝をすることはできない。母は俺のことを理解してくれていたのだから、多少の仕送りだったらくれるだろう。狂気になるくらいだったら、割り切って、生きたほうがいい。無理して他の同年代の連中に追いつこうとすると、また狂乱の世界へと逆戻りになる。

大学時代の俺は、必死になって人間関係を築こうとして、しかし、築けなくて、苛立っていたのだ。大学院に入って、俺は、居直って、ぼっち君でいようと思った。人付き合いは極力避け、非常勤の仕事を探す努力もしなかった。ただひたすら今を生きた。あの頃、心は安定していた。人間は、一人の方が心は安定するのだ。他からの雑音が入ってこないからである。

しかし、心の安定の代償として、仕事は出遅れた。もうすぐ大学院も終わりなのに非常勤の声すらかけてもらえない俺は、修士課程時代の先生に年賀状を出し、その時に一筆そのことを書いた。その先生は神様のように優しい先生だった。その大学で2月に急にやめる先生が出て、その先生の口添えもあって、どうにか満期退学の寸前に非常勤の口が見つかり、首の皮がつながったのだった。今思えば、その先生に感謝せずにはいられない。もう10年以上も前になくなったけれど、天国で安らかにお過ごしだろうか。

そして、29歳からの1年間で、俺の人生はやっと少し自立への道へと動き始める。非常勤の仕事は思っていたよりも楽しかった。これからもっと増やそうと他の大学にも頼んで、仕事は30歳から増えることになった。収入が増えるので少しだけ高い下宿に移った。好調だった。ところが、ちょうど30の誕生

日の頃、大学の春休みの頃に、また大きなトラウマ的な出来事が起きた。今思えば、俺に社会性がなかったがゆえに起きたこと。別に不運なことというのでもない。しかし、そのことで俺の心は再びコントロールをなくして、俺は1週間ほど、心が嵐のような状況になり、また再び自分を見失うことになる。

俺は意を決して、近くの心療内科へ行った。俺の30代は精神病院から始まったのだった。精神科が、心療内科と呼ばれるようになり、敷居が低くなったのは、ちょうどその頃からである。

2. 女性恐怖症は治らない。

あれから、21年かあー。確かにあの当時に比べれば俺は成長しただろう。仕事にはすっかり慣れたし、この21年の間にはカウンセリングもたくさんうけ、社会活動にも参加し、世の中のこともたくさん勉強した。大学だけではなく、翻訳の仕事もしたし、専門学校でも非常勤をしたことで、すっかり人間関係にはたくましくなった。今となっては、友達がたくさんだ。しかし、結婚したり、パートナーをもったりすることはできない。

「誰かとおつきあいでしたら」

行きつけのレストランの女性から言われた。俺は、悶々として暮らしている。自分の生活に不満があるわけではないが、何か欠けている。そう思う毎日だ。彼女は、そういう俺に美味しい料理をつくってくれて、家族の気分を味合わせてくれる人である。

「いや、ぼくは女性恐怖症なんですよ」と、俺は笑って応えた。俺が、自分が女性恐怖症だと言うことをカムアウトしたのは、もう5、

6年前の事だ。それから楽になった。俺が女性にトラウマを負わされる過去をもち、女性と前向きな付き合いができないのは事実であり、それを隠して生きて行くのはしんどかった。女性恐怖をカムアウトしたことで、俺の長年の肩の荷はおりた。しかし、カムアウトしても、女性恐怖症は治るわけではない。おそらく、少年期に女性からトラウマを負われ、年相応に女性とつきあっていないことが、この歳になって、女性と積極的に付き合いえないという後遺症の原因になってしまっている。

中学くらいから引きこもって行き、高校に行けず、学歴マイノリティになってしまった俺は、マイノリティであることの重荷に折り合いをつけることに気を取られるなかで、女性恐怖が固着してしまっていたのだ。

伊藤公雄さんが『男らしさのゆくえ』のなかで、男らしさを過度に追求したり、あるいはそこから撤退したりすると対幻想の入る隙間がなくなり、女性は観念化された存在でしかなくなると述べている。難しいのだが、おそらく、例えば戦争のような、過度の男性ジェンダーの世界だと当然男の世界となって女性が入る隙間がなくなり、逆に完全に男性ジェンダー・男らしさを拒否してしまうと、女性とつきあえなくなるということなのだろう。俺は後者のタイプだ。

男らしさから撤退した俺は、もう女性は要らなくなってしまっているのである。俺のことを男とっていない女性とは普通につきあえる。しかし、俺を恋愛対象としてみる女性とは怖くてつきあえない。俺は、女性から男らしさを求められると過度に反発してしまう。こんな男が女と上手くいくわけがないのだ。男に男らしさを少しも求めないで、恋愛する

女が果たして世の中にいるだろうか。

岸田秀さんの『性的唯言論序説』という本を読んでいる。もう15年以上前に書かれた本だが、この本の一節に、売春婦になる女性のなかには子供の頃に性的虐待を受け、それと同じことを強迫的に反復することによって、自分のトラウマを治そうとする神経症的状況に陥っている女性がいるのだと書かれていた。

同じく岸田さんの『ものぐさ精神分析』のなかにも、男運が悪いと言われる女性はいるけど、例えば、DVの被害者になるような女性は、子供の頃にDV家庭に育って、その時のトラウマを癒したいから、無意識にそういう男を選択してしまうのだとも書かれている。

とても深い説である。

他にもこれと同様の説をいろいろな人が言っているのだが、岸田さんの説明が一番わかりやすく、俺は目から鱗が落ちたような気持ちだった。

性的虐待やDVに深く傷ついた女性が、なぜ、過去と同じ状況に自らを追いやっていくのか??? きわめて逆説的だ。しかし、人間は考えてみれば、そうなのだ。俺は、まさしくこの強迫的反復症に陥っていて、そこから抜け出せなくて、苦勞しているのである。

俺は毎日のように自分を傷つけた人のことを思い出す。小学校の高学年の頃の女性教師、中学の時の体育教師、不登校の時のカウンセラー、大学の頃、俺を口説こうとしていた女の子、嫌な奴を思い出すことによって、俺は心のどこかで、それを克服したいと思っているのである。

トラウマを忘れることはそう簡単じゃない。忘れられないのならば、向かい合うしかない。俺はずっとそう思ってきた。そして、反芻し

たことで成長した面もある。しかし、その一方で、あの時、言えばよかったことが浮かんできて、つらくなるのだ。もうあいつらと会うすべもない。あいつらは俺のことを思い出もしないだろうし、まして、俺をここまで長く苦しめたことを考えたこともないだろう。かくいう俺だって、誰かを知らぬ間に傷つけてきているはずだ。人間って悲しいなあ。痛恨の思いを抱えたまま、人は一生を終えるのだろうか。

「そんな！？ 女性でなくて構わないじゃないの。男の人だっていいわけだし」とレストランの女性は、「あなた遅れているのねー」と言わんばかりの言い方で言ってくれた。

「まあ男の人とはつきあっていますよ。ただゲイ関係ではないし、とても仲のいい友達というところなんです。」

俺は女性とつきあうよりも、気の合う男性とじっくり友情を温めている方が好きだ。実際、俺と一緒に食事をして、風呂で裸のつきあいをしてくれる男性は何人かいる。ゲイ関係ではないが、男の友達であっても、好みというのはあって、好きな男性でなかったら一緒に風呂に入りたいとは思わない。一緒に風呂に入って楽しいかどうか、俺の友情の基準と言っていいかも知れない。

正月も、仲良しの友達と船岡温泉に行き、それからラーメンを食べた。ラーメンは太るから普段は控えているのだが、正月だから特別に二人でカウンターに並んで、熱い汁をすすったものだ。

3. 失われた少年時代を求めて。

正月と一緒に風呂に行ったのは、身体のメ

インテナンスをしてくれているマッサージの友人である。彼は定期的に俺のところに来てくれているので、会う機会は多いし、もう俺の事を何もかもわかっている。

「この間、仕事で一緒のフランス語の先生と怪我の話になった時に、『前に部活で突き指した時に……』とふと漏らされて、俺、その一言で悲しくなっちゃったんだよね。何故かわかる？」

「その先生が部活でバレーかなんかやっていたことが、羨ましいんでしょ（笑）？ もう俺は國友さんのことは全てわかっていますよ」

彼と親密になってから、かれこれ2年半が過ぎようとしている。その間、治療を受けながら、俺は彼にすべてを話してきたのだ。俺は、中学の頃から完全にクラスで浮いていて、高校にはまともに行けず、当然、クラブ活動の経験なんてない。京都は修学旅行生が多いが、俺は、グループで、バスに乗っている、修学旅行生を見ただけで、悲しい気持ちが出てきて、いたたまれなくなる。あの頃の俺は、グループ活動が一番嫌いだ。グループ作りとかが行われると、俺はいつだってグループに入れなくて、仕方が無いからどこかに押し込んでもらおうという状況だった。惨めだった。俺はいつだってグループの女の子たちからバカにされながら、小さくなってグループに入れてもらうしかなかった。しかし、ジェンダーの活動で知り合ったやつらは、こんな俺にさえ、「女を下位のものと見なしている男性優位主義者」のレッテルを貼ってしまう。男は一枚岩じゃないんだよ！ お前ら何にもわかっていない（怒）……。さまざまな思いが、修学旅行生の微笑ましい光景から俺

の心の中に膨らんで行く。切ないなあー。

「でも、そうやって人生の悲しみを味わっている時に國友さんは、人生を感じるんじゃないんですか？」とマッサージの彼は言ってくれた。

確かにそうだ。ポジティブな俺なんて想像できない。俺はネガティブなのが俺らしいのである。

マッサージの彼には、本当に若い頃をしたかった事をたくさん味合わせてもらった。鴨川の川縁を上半身裸で散歩、須磨海岸で海水浴、スポッチャでローラースケート、キャッチボール、卓球、ボーリング、それに温泉も何回もいったなあー。彼は見事なヘラクレスなので、彼と風呂に入るのは誇らしかった。周りの人たちが彼の見事な身体に見とれていたりするからである。「俺は、この人の友達なんだぜ！」と鼻を高くしながらも、同時に友達の一人もいなかった少年時代がわき上がってきて、悲しくなるのである。

俺は青春時代に失うものが大き過ぎたのだった。

4. いつか普通になれる

今、『6才のボクが大人になるまで。』という映画が話題になっている。アカデミー賞では作品賞は逃したものの、大量にノミネートされ、お母さん役のパトリシア・アークエットが助演女優賞を獲得した。

アメリカ映画だが、6才の男の子が大人になるまでのドラマを12年間かけて撮っていて、しかもドキュメンタリーではなく、ドラマ映画なので、俳優さんたちがそのまま老けていく。実験的なつくりの映画である。3時

間ほどの長尺で、地味な話なのだが、絶賛の嵐だ。俺の友人の男性も、「アメリカの男の子って、こうやって大人になっていくんだなあと思って、そこが面白かった」と言っていた。なるほど、そう言われてみれば、そうだ。お母さんも、お父さんも存在感があるし、特別ドラマチックなことが起きるわけではないのだが、エピソードにリアリティーがあって、アメリカの普通の家庭の男の子の成長プロセスの物語という印象になるのである。アメリカは多様な国だから、何をもって普通とやっていいのかは難しいのだが、いかにも一般の人がイメージしそうなアメリカ人の風景がこの映画には溢れている。

日本で、こういう映画を作ったとしたら、どうなるだろうかとふと思った。

おそらく、小学校ではゲームに夢中になり、中学から野球やサッカーを始め、家族向けのマンションで暮らし、お父さんは多少気が弱いけど真面目に仕事をしていて、お母さんはパートをしながら家事をしている。高校くらいから女友達ができ始めて、高卒後は都会に出て下宿、バイトしながら大学に通い、お酒やタバコやセックスを覚えて大人になっていく。そういうストーリーとなりそうな気がする。

俺は、そういうストーリーにならなかった。15で心が壊れ、高校に行かれなかった俺は、普通からは大きく外れたストーリーを歩むことになったのだ。普通でないことというのはつらいこと。男性ジェンダーの問題がなかなか広がらないのは、人間は普通でいたいという気持ちが強いからだろう。多少、ジェンダーに理不尽さを感じても、男という枠のなかで折り合いをつけて生きていた方が楽だ。そ

のほうが普通だし、普通でいることが楽なのである。しかし、俺は、少年時代に様々な問題が噴出し、普通でいようにもいけない、不可抗力的に普通のルールからそれることになってしまったのだった。

しかし、俺の心が壊れてから36年が過ぎ、その間には社会も変わった。何よりも普通という概念が以前に比べればゆるくなった。まったく普通の平凡な人生を歩む人なんて、今時滅多にいない。そして、年を重ねるごとに、運命の過酷さを知る人の数は多くなる。俺の人生は、15で大きなドラマが起きたが、中年になって、大きな運命に巻き込まれる人も出てくるのである。

もう考えることはやめよう。今は、1日1日を大事に生きるのみだ。そのうち何か新しい展開があることを信じて。いつか女性恐怖も治るだろう。すべてがおさまるところにおさまるだろう。おそらく、まだ俺の人生は、30年は確実にある。俺の家は長生きの血筋だから、80くらいまでは元気でいれるはずだ。昔は人生50年だったはず。そう考えれば、俺はまだ21歳なのだ。

5.『あぜ道のダンディ』(石井裕也監督・2011)

『あぜ道のダンディ』は、小さな映画だが、男ってというのは少年の時に思い描いた理想の男性像を中年になっても捨てられないんだなあということをおわせてくれる。この主人公は本当にいじらしくて、エールを送ってしまいたくなる。どんだけ、しんどくても、誰も認めてくれなくても、ダンディでいようとするのだから。男性ジェンダーに依存して、あぜ道を歩いていくことをよすがにしている男。

男って、悲しいけど、愛おしいと思わせてくれる映画だ。おそらく、日本の普通(?)の男たちは、これに近い生き方をしているのだろう。

この映画は男を考えるために、いい映画だ。ただ、すべての男がこうだとは思わないで。俺は、ダンディになりたくてもなれない資質で生まれ、その結果、少年の頃に心が壊れ、そこから少しずつ自分を構築していく人生だったのだ。。。そして、いつか構築できる日を願いながら、今でも日々を生きている。『男へと向かう道を歩む男になれない男』のような人生なのである。

さて、話は変わるが、ここ数号、この連載をリニューアルしたいんだと自分で言ってきた。しかし、どうリニューアルしていいのか。今だに糸口が見付からない状態である。

当初はこの連載を最近の日本映画を使って、男性問題を語るという目的でスタートさせたのだが、いかんせん、忙しい。映画のテキスト分析は結構時間がかかって、忙しい最中にやっていくのは困難であるということがわかってきた。また、俺はそもそもアメリカ映画が専門なので、日本映画の専門家ではない。したがって、専門外の事をあれこれ語っていくのは、僭越という気持ちが出てきた。

それに、この連載は自分史を語るエッセイなので、どこまで書いていいのかが心配になる。ぼやかして書いているつもりだが、登場してくる人が特定されてしまった場合に、問題になるのではないかという不安も出てきたのである。

まず何よりも、これは自分自身を援助するために始めた連載だったのだけど、果たして、

連載を始めて3年もたって、俺は変わったの
だろうかという不安がある。この3年の間に、
仕事や人間関係で新たな展開はたくさんあつ
て、しかも、よい方向への転換だったと思
う。しかし、肝心の俺の心は、どうなのだろ
うか。徐々に治癒はしているが、トラウマは
消えてはいないのである。

また読者の人たちが、この原稿を読んで果
たして何を感じているのかもわからない。最
初の時は、ツイッターで「面白い」という評
価が来たのだが、その後は何も来ない……と
思っていたら、読者の人からのファンメール
が転送されてきた。ということは、この連載
を楽しんでいるという人も一握りはいるとい
うことなのだろう。「じゃあ、とりあえず、変
えることもないか。いい案が浮かぶまでは…
…」と強引に自らを納得させ、今回もいつも
と似たり寄ったりの内容でお許してください
(笑)。

ご意見のある人は、ぜひ、メールを!!!
とりあえず、今回のオススメ映画は『あぜ道
のダンディ』です。